

幼児の生活に家族はどう関わっているか

猪野郁子*

Ikuko Ino

The Young Children's Living Conditions have a Great Formative Influence on the Family Make-up

1 はじめに

「子どもの生活がおかしくなっているのではないか」と小中学校の教師のみならず保育所や幼稚園の教師からも語られだしてから久しい。非行の蔓延化や低年齢化および最近の子どもたちの体のおかしさは生活のおかしさに関わっているのではないかという報告もなされている^(1~2)。

城丸章夫が子どもの生活リズムはおとなの生活リズム（＝労働から生まれたリズム）であるから、両親がどのような家庭のリズムを作って生活しているかが大事なのだと述べている⁽³⁾ように、子どもの生活リズムがおかしくなってきたのはおとなの生活リズム自身が崩れてきているからであり、子どもの生活リズムの乱れや体のおかしさはおとなが作り出したものといえる。

また、食生活調査⁽⁴⁾においては、誕生をむかえるかいなかの乳児にチョコレートやラーメンを食べさせていたり、2,3歳児が清涼飲料水や炭酸飲料水の缶を抱えていたり、インスタントコーヒーが幼児に一人前に容れられていたりと大人と子どもの境がなくなりつつあると報告されているように、反面、子どもが子どもであるが故に守られねばならない生活が保障されていないとも言える。

職業を持つ母親が増えていること、世の中の生活のスピードが早くなっていること、そのことが他者への思いやりより自己を主体にして生きる生活像になっていること、家庭機能を代替する産業が発達したことにより時間をお金で買う生活（消費生活）が普通になったことなど様々な要因が複合してこうした現象をもたらしているであろう。

家族は、夫婦と未婚の子どもからなるもうこれ以上分解できない集団（核家族という）が基本であるといわれているが、核家族においては、構成メンバーに与えられた役割を代替する者がいないという欠点や相互作用の凝集度が低くなりやすいことから、家族が小さくなればなるほど崩壊し易いといわれている⁽⁵⁾。それ故、こうした様々な要因はどちらかといえば夫婦と子どもで構成される家庭（核家族）により強く影響を及ぼすのではないかと考えられる。

そこで、本報では子どもの生活リズム、しつけおよび食生活に家族がどう関わっているかを明らかにし、家族構成が子どもの生活に影響する要因の一つであるか検討を行う。

2 対象及び方法

県庁所在地（市部）の保育所と幼稚園、山間部の保育所および漁村部の幼稚園と保育所に在籍する4,5歳児の保護者計407人を対象に、幼児の生活、生活習慣および虫歯と関わりと考えられる食事等についての67項目からなる質問紙調査を実施した。67項目の中から、生活については、起床と就寝時刻および朝食と夕食時刻を、生活習慣としては、食前の手洗い、食後の歯磨き、食前食後の挨拶および食事時のテレビ視聴を、食生活では風習として残る「お茶ごと」と食欲・偏食・虫歯（う歯）との関係および煮物の調理を本報では取り上げる。

幼稚園と保育所の保護者を対象としたのは、対象者の偏りをさけるためであり、また山間部と漁村部からも対象を求めたのは地域性を考慮してのことである。回収された中から記入不備なものおよび母子及び父子家族を今回の考察から省いた。その結果、表1に示すように核家

* 島根大学教育学部家政研究室

表1 対象者の概要

人数 (%)

	地 区			母 親 の 年 齢			母親の職業の有無		子 ども の 位 置				子どもの性別	
	山	村	漁 村 市 部	～30	～35	35～	あ	り な し	一	人 長 子	中	間	子 末 子	男
核家族 163人	4(3)	22(13)	137(84)	39(29)	71(44)	53(33)	60(37)	101(63)	12(8)	52(32)	32(20)	65(40)	84(52)	77(48)
拡大家族189人	67(35)	81(43)	41(22)	33(18)	106(57)	48(26)	126(68)	60(32)	12(7)	60(32)	37(20)	76(41)	87(47)	98(53)
χ^2 検定 (核・拡大間)	$\chi^2=143.18$ df=3 P<0.000			$\chi^2=6.25$ df=2 p<0.05			$\chi^2=32.22$ df=1 P<0.000							

族163人拡大家族189人計352人が対象者となった。なお、各項目の合計が総数と一致しない場合は無回答者を除いているからである。

表1に示されるように、核家族は市部に集中しているのに対し山間漁村部に拡大家族は分散している。このことが母親の職業の有無に関係し、拡大家族が有意に高い比率で職業を持っている。山間部及び漁村部の若い世代は夫婦とも賃金労働に従事し、隣接地かあるいは車で1時間以上かけて市街地に通勤しているのが実状である。

対象とした子どもの兄弟に占める位置及び性別は家族によって違いはみられない。母親の年齢は、拡大家族は30～35歳に集中しているのに対し、核家族は各年齢群に分散している。

調査は、1992年7月から9月にかけて実施された。回

収率は92%である。

3 結果および考察

1) 生活リズム

a 起床と就寝

最近の幼児は、就寝が遅くなっているといわれているが、地方にも影響しているであろうか。ここでは、起床と就寝およびこれらと関係する朝食と夕食の時刻をみていく。

起床をみると、表2に示すように拡大家族が明らかに早く起きている。核家族では地域差はみられないが、拡大家族では山間部が早く6時半までに50%近く起床しているのに対し、市部は20%と地域差がみられる。拡大家

表2 起床・朝食、夕食と就寝時刻

人数 (%)

	核 家 族				拡 大 家 族				
	山	村	漁 村 市 部	小 計	山	村	漁 村 市 部	小 計	
	4	22	132	158	62	80	41	183	
起床時刻～6:00	0	0	6	6(4)	8	8	2	18(10)	核・拡大家族間
～6:30	1	6	17	24(15)	21	16	8	45(25)	$\chi^2=22.56(df=4)$ ****
～7:00	3	13	57	73(46)	27	46	17	90(49)	拡大家族内間
～7:30	0	3	35	38(24)	6	10	11	27(15)	$\chi^2=21.94(df=8)$ ***
7:30～	0	0	17	17(11)	0	0	3	3(2)	
朝食時刻～6:30	0	0	1	1(1)	0	4	1	5(3)	核・拡大家族間
～7:00	1	7	21	29(18)	32	26	5	63(34)	$\chi^2=21.87(df=3)$ ****
～7:30	2	11	52	65(41)	24	37	19	80(44)	拡大家族内間
7:30～	1	4	58	63(40)	6	13	16	35(19)	$\chi^2=26.34(df=6)$ ****
夕食時刻～6:30	0	6	40	46(29)	2	36	17	55(30)	
～7:00	4	12	67	83(53)	22	36	21	79(43)	
～7:30	0	3	15	18(11)	18	8	2	28(15)	拡大家族内間
～8:00	0	0	10	10(6)	20	1	1	22(12)	$\chi^2=68.26(df=6)$ ****
8:00～	0	1	0	1(1)	0	0	0	0	
就寝時刻～9:00	4	17	80	101(64)	26	49	29	104(57)	
～9:30	0	2	19	21(13)	15	19	6	40(22)	
～10:00	0	2	27	29(18)	18	11	5	34(19)	拡大家族内間
10:00～	0	1	6	7(4)	3	0	1	4(2)	$\chi^2=14.43(df=6)$ *

*p<0.03

***p<0.005

****p<0.0001

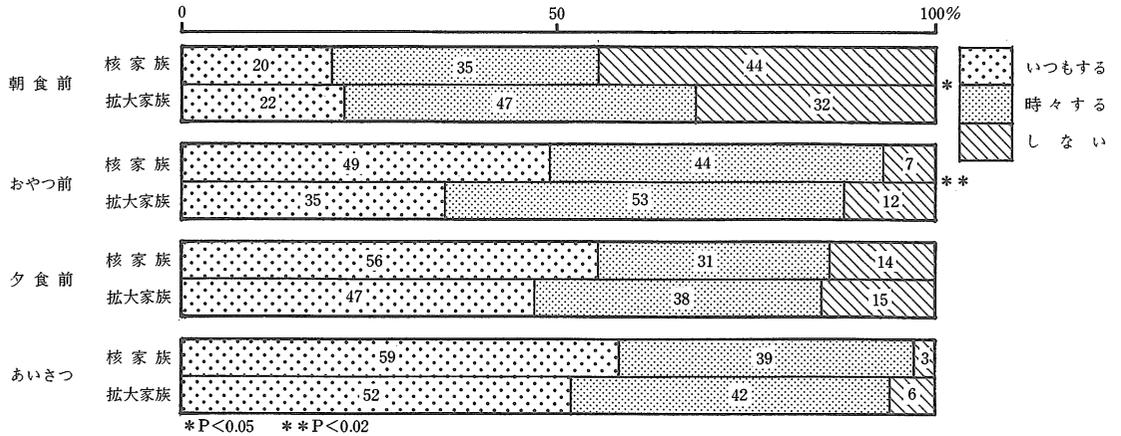


図1 食前の手洗いと食前食後の挨拶

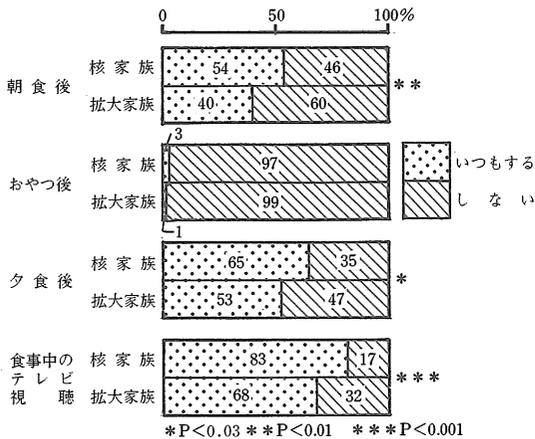


図2 食後の歯磨きと食事時のテレビ視聴

族内で地域差がみられるのは、同居する祖父母が早起きであることに加えて、山間部や漁村部の両親が朝早く出勤しなければならないことが大きく影響していると考えられる。

起床は当然朝食時刻にも影響し起床の遅い核家族と市部の大家族の朝食時刻は山間漁村部の大家族より有意に遅くなっている。

夕食は市部や漁村部が19時までに8割以上が済ませているのに対し、山間部の大家族は19時を越えるものが半数以上おり明らかに地域差がみられるが、家族構成別には明確な差異はみられない。

就寝時刻はほとんどの子どもが22時までに就寝しているが、大家族で市部と漁村部に比べて山間部の子どもに21時以降に就寝する子どもが有意に多くみられた。家族構成別には、明確な差異はみられない。

朝食にかかる時間は家族構成によって差異はみられな

いが、夕食にかかる時間は20分以上かけている核家族が79%に対し大家族は65%と核家族が有意に長くかけている(表略)。

これらは日本小児保健協会がおこなった「幼児健康度調査(1991)」の結果⁽⁶⁾とほぼ一致している。

これらのことから、起床と朝食には家族の影響もみられるが、生活地域と両親の勤務地との距離がより影響していると考えられる。つまり、勤務地の市部に遠い山間部の両親は通勤に時間がかかるため出勤時間が早く帰宅時間が遅くなり、そのため起床と朝食時刻は他地区より早い、夕食と就寝時刻が遅く結果的に睡眠時間が短くなっている。また、夕食にかかる時間も短いことから、親子の交流(家族の交流)が十分になされているか心配される。

b 生活習慣

ここでは、食前の手洗い、挨拶、食事時のテレビ視聴および食後の歯磨きについてみていく。

図1は食前の手洗いと食前食後の挨拶についてみたものである。朝食前は大家族の方が手洗いをさせているのに対し、おやつ前は明らかに核家族の方がいつも手洗いをさせており、夕食前は家族構成に関わらず半数はいつも手洗いをさせている。

核家族の朝は、両親も子どもも朝食をとって出かけるのに忙しく食前の手洗いにまで神経を回すことができないことを物語っている。核家族は起床および朝食時刻が遅いことも関係していよう。

食前食後の挨拶は、半数はいつもしている。

図2に食後の歯磨きと食事時のテレビ視聴の割合を示した。食後の歯磨きについては、朝食後夕食後とも核家族が明らかにさせているが、おやつのはいずれもさせ

ていない。

食事中のテレビ視聴は、つけない家庭は拡大家族に多い。

食前の手洗いや食後の歯磨きにおいて、核家族の方が熱心につけているように見えるのは一つには子育てに専念している母親が多いからであろう。

2) 食生活

a 「お茶ごと」と食欲等との関係

この地方には、「お茶ごと」といって隣近所の人々が集まってお茶を飲みながら歓談する習わしが残っている。お茶口にされるものは、漬物・煮物が主体であったが、最近はこちらに和洋菓子やスナック菓子等が加えられ食卓に並べられる。時には常時食卓上にこうした食品が並べられていることもあり、食べ過ぎ・塩分のとりすぎ等によって成人病の引金ともなりやすとして、最近では保健婦の指導で「お茶ごと」は制限されるに至っている。

また、ゆっくりお茶を飲み、話に花を咲かせる余裕が老人層にもなくなりつつあり、最近はこうした風習もすたれ気味であるが、表3にみられるように、山間部や漁村部の拡大家族には20数%みられ、核家族より食卓上に食物を置いている家庭が有意に多い。

では、このことが夕食欲・偏食及び虫歯とどの様に関わっているのであろうか。

表3に示すように、偏食、夕食欲及び虫歯数は食卓上に食物を置いている家庭の子どもに多いという結果は出していない。

表3 食卓上の食物と虫歯数及び偏食の有無

	置いて いる	置いて いない	χ^2 検 定
核 家 族	16(10)	146(90)	$\chi^2=8.954$ df=1 P<0.005
拡 大 家 族	41(22)	148(78)	
虫 0 本	9(16)	58(20)	
歯 1~3	25(27)	73(25)	
数 4~8	21(38)	118(40)	
9~	12(20)	45(15)	
偏 食 な し	15(27)	90(31)	
少 し	36(64)	161(55)	
多 い	5(9)	43(15)	

表4 一週間の家族別煮物の回数と虫歯数との関係

	虫 歯 の 数			χ^2 検 定	
	0 本	1~4本	5本以上		
核 家 族 煮物 4 回以下(107)	18(17)	35(33)	54(50)	$\chi^2=8.42$ df=2 p<0.02	煮物回数 家族別 $\chi^2=69.81$ df=1 p<0.000 虫歯数別 $\chi^2=6.83$ df=2 p<0.03
5 回以上(55)	13(24)	23(42)	19(35)		
拡 大 家 族 煮物 4 回以下(40)	3(8)	9(23)	28(70)		
5 回以上(145)	30(21)	50(34)	65(45)		

拡大家族の幼児の大半は保育所で一日過ごしていること、今回の調査地区ではこうした風習が食生活改善という目的でなくなりつつあることから、幼児の食生活への影響が減少しているのであろう。

b 煮物

垣本らは、野菜嫌いの者に虫歯(う歯)が多い傾向を示すと報告⁽⁶⁾している。野菜の摂取の方法として、一度にたくさんとれることと摂取する野菜の種類も多様であるの理由で、「なま」ではなく「煮物」とし摂取することが進められている。そこで、一週間に煮物が食卓にのぼる回数をみたところ表4の結果を得た。拡大家族に5回以上作る家庭が明らかに多い。

そこで、「おふくろの味」といわれている煮物を含めて9品目について家庭で作るか作らずに購入するかを調べたところ表5の結果を得た。最もよく作られている献立は、9品目の中では「煮魚」であり、次は「肉じゃが」であった。「きんぴらごぼう」と「肉じゃが」は家族構成による差はみられなかったが、他の7品目においてはいずれも拡大家族の方に作る家庭が多い。特に、「おから煮」は拡大家族は作っているのに対し、核家族の20%近くの家庭は購入している。また、調査時(夏)季節の野菜の煮物としてどの家庭でも作られていたであろう「なすの煮物」は核家族で作らない家庭が明らかに多いこと、「丸干しいわし」なども食されていないことなどが注目される。

それでは、作られたこれらの料理が食されているかどうかみてみよう。「きんぴらごぼう」の核家族を除いて、いずれもこれらの料理が作られる家庭の幼児が作らないあるいはたまにしか作らない家庭の幼児より食していることが明らかになった。

では、これら9品目を食している幼児と食していない幼児とでは虫歯の数に違いがみられるかどうかみたところ、この両者の間には明確な関係はみられなかったが、表4に示したように、煮物の回数が少ない家庭の幼児に虫歯(う歯)の多い子どもが明らかに多いこと、特にこのことは拡大家族に顕著であることが明らかとなった。

先に述べたように、拡大家族は山間部や漁村部に多く、

表5 煮物作る家庭の子どもは食べているか

		よく作る	たまに	作らない	購入する	家族間内	核と拡大間
きんぴらごぼう	核家族	食べる 14(25)	39(68)	4(7)	0	$\chi^2=11.34$ df=3 p<0.01	
		食べない 15(15)	72(70)	12(12)	4(4)		
		小計 29(18)	111(69)	16(10)	4(3)		
	拡大家族	食べる 14(26)	40(74)	0	0		
	食べない 15(11)	101(77)	14(11)	1(1)			
	小計 29(16)	141(76)	14(7)	1(1)			
ひじきの煮物	核家族	食べる 12(24)	32(64)	3(6)	3(6)	$\chi^2=8.43$ df=3 p<0.04	$\chi^2=9.09$ df=3 p<0.03
		食べない 11(10)	76(69)	19(17)	4(4)		
		小計 23(14)	108(68)	22(14)	7(4)		
	拡大家族	食べる 26(45)	32(55)	0	0		
	食べない 19(15)	87(69)	19(15)	2(2)			
	小計 45(24)	119(64)	19(11)	2(1)			
大根の煮物	核家族	食べる 22(35)	40(65)	0	0	$\chi^2=16.37$ df=3 p<0.0003	$\chi^2=6.72$ df=2 P<0.03
		食べない 12(12)	77(79)	9(9)	0		
		小計 34(22)	117(73)	9(6)	0		
	拡大家族	食べる 35(49)	36(50)	1(1)	0		
	食べない 27(24)	82(73)	4(4)	0			
	小計 62(33)	118(64)	5(3)	0			
煮魚	核家族	食べる 68(54)	56(44)	2(2)	0	$\chi^2=7.89$ df=2 p<0.02	$\chi^2=10.69$ df=2 p<0.004
		食べない 15(44)	15(44)	4(12)	0		
		小計 83(52)	71(44)	6(4)	0		
	拡大家族	食べる 103(75)	34(25)	0	0		
	食べない 25(52)	22(46)	1(2)	0			
	小計 128(68)	56(31)	1(1)	0			
なすの煮物	核家族	食べる 9(36)	15(60)	1(4)	0	$\chi^2=6.32$ df=2 p<0.04	$\chi^2=54.81$ df=2 p<0.000
		食べない 26(19)	79(59)	30(22)	0		
		小計 35(22)	94(58)	31(20)	0		
	拡大家族	食べる 25(86)	4(14)	0	0		
	食べない 83(53)	65(42)	8(5)	0			
	小計 108(58)	69(38)	8(4)	0			
おから煮	核家族	食べる 4(14)	13(46)	6(21)	5(18)	$\chi^2=14.74$ df=3 p<0.002	$\chi^2=57.05$ df=3 p<0.000
		食べない 2(2)	43(33)	61(46)	26(20)		
		小計 6(4)	56(35)	67(42)	31(19)		
	拡大家族	食べる 10(24)	31(76)	0	0		
	食べない 9(6)	93(65)	37(26)	5(3)			
	小計 19(10)	124(66)	37(21)	5(3)			
丸干しいわし	核家族	食べる 16(30)	31(57)	7(13)	0	$\chi^2=28.70$ df=2 p<0.000	$\chi^2=12.57$ df=2 p<0.002
		食べない 5(5)	52(49)	49(46)	0		
		小計 21(13)	83(52)	56(35)	0		
	拡大家族	食べる 25(33)	49(65)	1(1)	0		
	食べない 9(8)	69(63)	32(29)	0			
	小計 34(19)	118(63)	33(19)	0			
肉じゃが	核家族	食べる 56(58)	40(42)	0	0	$\chi^2=6.78$ df=2 p<0.03	
		食べない 25(39)	38(59)	1(2)	0		
		小計 81(50)	78(50)	1(1)	0		
	拡大家族	食べる 65(58)	47(42)	1(1)	0		
	食べない 14(19)	53(74)	5(7)	0			
	小計 79(42)	100(53)	6(4)	0			
筑前煮	核家族	食べる 11(23)	30(63)	6(13)	1(2)	$\chi^2=15.14$ df=3 p<0.002	$\chi^2=12.88$ df=3 P<0.004
		食べない 8(7)	58(52)	43(38)	3(3)		
		小計 19(12)	90(55)	50(31)	4(3)		
	拡大家族	食べる 4(10)	34(83)	3(7)	0		
	食べない 4(3)	62(43)	77(53)	1(1)			
	小計 8(4)	97(51)	83(44)	1(1)			

また有職の母親が多いことから、夕飯の準備は祖母に任されているであろうと考えられる。また、山間・漁村部は自宅の畑で栽培された季節の野菜を煮物として食卓に供される機会も多いと推測される。もちろん、どれだけ食しているか、食している野菜の種類は豊富なかどうかは問われるが、煮物が食卓に登る回数が虫歯(う歯)数と関係していたことは注目される。

4 要約

おかしくなりつつあるといわれている幼児の生活リズム、しつけおよび食生活の面について家族構成がどの様に影響しているかの検討を行ったところ、次のような結果が得られた。

(1)起床および就寝時刻は、全国調査とほぼ一致している。が、核家族の幼児に比べ、拡大家族の幼児は起床が早く就寝が遅くなっている。

(2)おやつと夕食前の手洗いは、核家族の幼児にいつもしている子どもが多く、拡大家族の幼児との間に有意差がみられる。

(3)食前食後の挨拶や食事中のテレビ視聴には、家族構成による差異はみられない。

(4)食後の歯磨きは、核家族の方がよくさせており、拡大家族との間に有意差がみられる。

(5)「お茶ごと」の習慣は、拡大家族に20%強みられ核家族との間に有意差がみられる。

(6)しかし、このことが子どもの夕食欲や偏食に影響を与えていない。

(7)一週間の内で煮物が料理される機会は、拡大家族に明らかに多い。

(8)調査を行った9品目の中で最もよく作られているのは「煮魚」であり次いで「肉じゃが」である。

(9)「なすの煮つけ」「おから煮」「丸干しいわし」は、拡大家族に比べて核家族に作らない家庭が有意に多い。

(10)このような料理を作る家庭の幼児に食べる子どもが多い。

(11)煮物が供される回数が多いほど幼児の虫歯(う歯)は少ない。この傾向は拡大家族に顕著である。

以上である。幼児の生活に、家族特に拡大家族はプラスの方向に影響しているのではないかと仮説していたのであるが、核家族・拡大家族ともプラスマイナス両面あることが判明した。

拡大家族においては、養育方針での両親と祖父母との連携がうまく行われているかいないかが鍵であろうか。

島根県内のほとんどの町村の幼児保育教育施設は保育所であり、保育時間は夕刻15時から16時までである。そのため、山間部や漁村部の幼児は、保育所降所から両親が帰宅するまでの時間は祖父母と過ごさざるを得ない。

消費生活が中心の現在では、現金収入を得るために通勤可能な地に職場を求めざるをえないが、交通網の発達には、通勤可能圏を広げており、ますます両親の生活空間は広がっている。それ故、今後幼児は両親と過ごすより祖父母と過ごす時間が長くなるであろうし、また、幼児の生活リズムにもさらなる影響を及ぼすことになる。

このことは、祖父母の孫養育への役割や責任をさらに重くすると考えられる。

しかし、高齢化と過疎化の進む地域では、孫の養育は大変荷の重いものではなかろうか。

過疎化の進行と出生率の低下は、地域の教育力や個人の養育力の低下を引き起こしており、反面、一人の子どもへの期待を増加させていることも祖父母への負担とならう。

最近、養育放棄や虐待あるいは育児ノイローゼなど育児不安の母親たちへの育児支援について、行政・民間を問わずいろいろ提唱されているが、もっと地域の実態に即した支援体制を考えていかねばならないであろう。

島根県では、その一つとして祖父母の孫養育を支援する体制や組織作りが早急に取り組まれる必要があるのではなかろうか。

家族が幼児の生活にプラスに作用し、健全な生活を保障するために、両親や祖父母にどのような支援体制が必要とされ、組織としてどのようなものが求められているか検討していくために、対象地域を広げると共に、三世代の生活がどのように行われ、祖父母がどの程度幼児の生活に関わり責任を持っているのかを詳細に分析することが求められる。今後の課題としたい。

本調査は、1992年度卒業研究漆谷朱美「養育態度に関する一研究」の一環として行われた。調査に協力いただいた保護者の皆様と漆谷氏にここに謝意を表します。

参考文献

- (1) 河添邦俊：生活リズムと幼児・小・中学生の発達
〈主として非行との関係〉、ひかり書房、1988
- (2) 正木健雄：子どもの体力、大月書店、1979
- (3) 城丸章夫：幼児のあそびと仕事、草土文化、1981
- (4) 猪野郁子：幼児の嗜好飲料・菓子の飲食状況、島根大学教育学部紀要、21、1987
- (5) 松原治郎：NHKブックス核家族時代、日本放送出版協会、1969
- (6) 日本総合愛育研究所編：日本子ども資料年鑑 第三卷、KTC中央出版、1992
- (7) 垣本充：幼児の食物嗜好と身体的徴候に関する研究、栄養学雑誌、36、1978